

越中高岡蘭方医の研究

正橋剛二

Research on the Physicians of the Western School in the Etchu Takaoka Region

はじめに

- ①門人帳の調査から
- ②高岡町の開町と医家の移住
- ③高岡医師の集団神農講
- ④牛痘種痘法の導入
- ⑤富山県下に見られるヒボクラテス像
- ⑥長崎の人たち、佐渡家の群像
- ⑦高岡に見る蘭方医学関連図書の集積状況

おわりに

[緒文・脚注]

旧越中国（現富山県全域）の医療史の調査に当たつて、資料の保存状況に領内東西、とくに両中心地富山と高岡では著しい差があるので、視点を変え、まず全国各地に残る医家門人帳から、逆に当時の越中人の足跡・動向を読み取ろうと試みた。結果、当時越中人は圧倒的大差をもって関西（京阪）志向であり、かつ、領内では東部より西部の人がより多く他国へ医学修行に出たことなどが判つた。

史料により多く保存される高岡を中心に調査を進めたが、高岡町は一七世紀初頭、加賀前田氏の幕府への周到な、和戦両用の配慮から計画的に開町され、諸方から集められた末端支配構造や医家についても元武士で先祖由緒書を持つ者が多い。史料の蘭方医学受容の証として、牛痘種痘法導入とヒボクラテス像の所在をみると、まず痘苗は嘉永三年一月五日、いち早く江戸の坪井信良から家兄佐渡三良（高岡）に届き、富山藩医の横地元丈が福井で笠原良策より伝苗を受けた一月二十四日に歩先んじたが、以後は痘苗の欠乏に苦しんだ。後者については所在の三点とも高岡の医家宅であった。長崎・佐渡両家の資料がよく保存されているのでこれを調査し、今も継続中であるが、長崎家はより漢学を好み、もっぱら邦訳資料を集め、横文字を忌避している風があり、表向きは、いわば和魂洋才の家風を保っている。半歩遅れた佐渡家では異教との医師たちは正徳年間（一七一一年）より互いの流派を超えて結社（神農講）を結び、切磋琢磨して医術の向上を計り、結果として対診（セカンド・オピニオン）なども自然に行われ、この活動は消長はある、明治期まで引継がれた。

高岡の蘭方医学志向は長崎家に始まり、高峰幸庵の移住（一八一三年）により中興を見て、長崎浩齋を生み、さらに佐渡家の甥たちにも裾野を拓げた。蘭方医学受容の証として、牛痘種痘法導入とヒボ克拉テス像の所在をみると、まず痘苗は嘉永三年一月五日、いち早く江戸の坪井信良から家兄佐渡三良（高岡）に届き、富山藩医の横地元丈が福井で笠原良策より伝苗を受けた一月二十四日に歩先んじたが、以後は痘苗の欠乏に苦しんだ。後者については所在の三点とも高岡の医家宅であった。長崎・佐渡両家の資料がよく保存されているのでこれを調査し、今も継続中であるが、長崎家はより漢学を好み、もっぱら邦訳資料を集め、横文字を忌避している風があり、表向きは、いわば和魂洋才の家風を保っている。半歩遅れた佐渡家では異教との医師たちは正徳年間（一七一一年）より互いの流派を超えて結社（神農講）を結び、切磋琢磨して医術の向上を計り、結果として対診（セカンド・オピニオン）これは時勢の移りの現われであろうと推察している。